Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-05-15

2010年上海万国博覧会をめぐって : 万国博史上における位置づけを中心に

重富, 公生

(Citation)
国民経済雑誌,202(6):15-26

(Issue Date)
2010-12

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81006977

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81006977

2010年上海万国博覧会をめぐって

――万国博史上における位置づけを中心に――

重　富　公　生

国民経済雑誌　第 202 巻　第 6 号　抜刷

平 成 22 年 12 月

2010年上海万国博覧会をめぐって

――万国博史上における位置づけを中心に――

重　富　公　生

愛知万国博から5年を経た2010年，上海で万博が開催されたが，この催しはいろいろな意味で万国博史上画期的なものとなった。とくにメイン・テーマとして「より良い都市，より良い生活」を掲げ，はじめて「都市」ないし「都市化」を文言として取り入れたことは注目に値する。本稿は欧米を中心とする万博の歴史のなかで今回の上海万博を位置づけることを主旨として，このテーマを軸に上海万博の概要を説明しようとするものである。過去最大規模を誇る会場で，パヴィリオン方式および映像展示という現代の万博の基本形態を踏襲しながらも，テーマを観客に効果的に理解させるための効果的な工夫がさまざまにこらされており，万博の新しい方向性を打ち出した催しとなっている。

キーワード　　万国博覧会，都市化，持続可能な発展，環境資源

1　は　じ　め　に

中華人民共和国上海市において，2010年5月1日から同年10月31日までを会期として上海万国博（正式名称は「中国2010年上海万国博覧会」）が開催された。上海万博は，日本以外のアジア諸国で史上はじめて開催された万国博であるということだけでなく，おそらく入場者数でこれまで最多の大阪万博の記録を塗り替えることが予想される集客力，膨大な会場面積，そして画期的かつ意欲的なテーマ設定などにより，近年の万博のなかでもとりわけ耳目を集める催しとなった。参加国数および国際機関数だけをあげても242にのぼり[1)]，直近の2005年愛知万博の実績である121カ国4国際機関を大幅に上回っている[2)]。また中国がGDP総額で日本を抜き去ると予測されている年に開催されたことも象徴的と言えよう。本稿は，主として万国博史上における位置づけという視角から今回の上海万博を論じようとする，ひとつの試論である。あらかじめお断りしておくと，筆者は欧米を中心とする万博の歴史について少しく調査しており，会期中6月上旬から中旬にかけて上海万博を一週間ほど視察する機会を得た。ただし中国経済・経済史についてはまったくの門外漢であり，そのような観点から上海万博を論じたものではない。また，本稿は万博会期中の2010年8月末に脱稿したものなので，入場者数などの最終的結果は未知であり，指摘した諸事実についても爾後多少の

変化・変更が生じている可能性があるが，その点ご海容を乞うものである。

2　万国博覧会のテーマとその役割の変遷

万国博覧会は原則として数年に一回開催される国際的かつ大規模な行事であり（開催の間隔が20年以上空いたこともあった），開催国にとっては社会の諸面での「発展」の成果を国際的に誇示する文字通り画期的な催しでもあった。そして万博の開催を機に，過去の万博とその時代的意義を回顧する催しや出版物が増えることも，ある程度共通してみられる現象である。本年３月に，1970年大阪万国博の一展示館であった鉄鋼館が「Expo'70 パビリオン」として，大阪万博を中心に万博の歴史を回顧する記念館としてオープンしたのも，その一環といえよう。2000年にはハノーヴァー万国博が開催されたが，この年には千葉県立現代産業科学館で特別展「万国博覧会の夢：万博に見る産業技術と日本」が開かれている。その図録の解説文の表現を借りれば，万国博の役割として次のような諸点があげられる[3)]。

・技術や文化の啓蒙普及の場
・商品の見本市
・世界の文化を認識する場
・大衆娯楽の提供
・開催国の意識の高揚
・都市整備の手段
・メッセージ性

1851年のロンドン万博から上海万博にいたるまで，上記の要素は多少ともすべて含まれているが，そのどれに重点が置かれているかは，いうまでもなく時代とともに変化してきた。表１は，この160年間に開催された主要な万国博覧会について，そのテーマを中心に主要な特徴をリストアップしたものである。

「万国博覧会」ないし「国際博覧会」と称する催しは，これ以外にも多数開催されている。しかし一般的にはパリに本部を置く「博覧会国際事務局」（Le Bureau International des Expositions，略称 BIE）が「一般博」として，また1996年に批准された新条約のあとでは「登録博」として認定した博覧会のみが正規の催しとなる。この国際機関が設立されたのは1928年のことであり，最初の「一般博」として開催されたのが1935年のブリュッセル万博であった。したがってそれまでの万博については，内容的，国際的および歴史的にとくに意義の大きいと考えられる催しをあげておいた。

さきにあげた役割のうち，それぞれの万博の目的としてどれが重視されて来たかは，通常は設定されたテーマによって知ることができる。表１にも記したように，統一テーマが設定されるようになったのは，1933年のシカゴ万国博以降のことであった。ただしそれ以前のそ

表1　万国博略年表

開催年	場所	特徴
1851	ロンドン	“The Great Exhibition of the Works of Industry of All Nations”
1853	ニューヨーク	ロンドン博の大成功に倣う。大赤字。
1855	パリ	フランス最初の国際博覧会。美術品の展示も。
1862	ロンドン	日本コーナー，日本人初の万博見学。
1867	パリ	各国館。欧大陸諸国と米の工業製品が注目をあびる。薩摩藩等出品。
1873	ウィーン	プラーター公園会場。明治政府が正式に参加。電気モーター。
1876	フィラデルフィア	米建国百周年記念。ミシン・タイプライターなど評判。
1878	パリ	エジソンの蓄音機，日本の美術工芸品。「ジャポニズム」。
1889	パリ	革命百周年記念。エッフェル塔。学術的国際会議の開催。
1893	シカゴ	新大陸発見四百周年記念。入り口に自動改札機。
1900	パリ	万国博史上，一頂点。動く歩道，映画，電力。
1904	セントルイス	ルイジアナ購入百周年。飛行機，自動車，無線電信。巨大博。
1915	サンフランシスコ	パナマ運河開通，太平洋発見四百周年。芸術とスポーツに重点。
1924	ロンドン	「大英国博」。英連邦諸国の力と協調をデモ。
1925	パリ	「装飾美術と近代工業」。アール・デコ主流。機能主義的現代建築。
1926	フィラデルフィア	建国150周年記念。巨大駐車場。
1930	リエージュ	ベルギー独立百周年。産業と科学。日本初の機械出品。
1933	シカゴ	初の公式テーマ「進歩の一世紀」。会場内交通にバス使用。
1935	ブリュッセル	「民族を通じての平和」。ベルギー鉄道開通百周年。
1937	パリ	「近代生活における芸術と技術」。プラネタリウム，「ゲルニカ」展示。
1939	ニューヨーク	「明日の世界」。ナイロン，プラスチック。会期中に大戦勃発。
1958	ブリュッセル	「科学文明とヒューマニズム」。人工衛星，原子時計，電子顕微鏡。
1967	モントリオール	「人間とその世界」。カナダ連邦百周年。集合住宅アピタ’67。
1970	大阪	「人類の進歩と調和」。月の石，リニアモーターカー，史上最多の入場者。
1992	セビリア	「発見の時代」。コロンブス新大陸到達五百周年。夜間開場。
2000	ハノーヴァー	「人間・自然・技術」。ドイツ初の大型万博。自然や環境への関心，大赤字。
2005	愛知	「自然の叡智」。自然や環境，資源が中心テーマ。

［出所］吉田邦光編（1999），191-192頁；久島伸昭（2004），237-245頁；『万国博覧会の夢』（2000），32-33頁。

れぞれの万博でも主要なテーマにあたるものが想定されていなかったわけではない。独立何周年，革命何周年と銘打った催しはそれにあたるが，やはり博覧会の趣旨を催しの名称としていた1851年のロンドン万博が典型的なものであろう。この万博の名称は「全諸国の産業成果の大博覧会」となっており，はっきりと産業・科学技術とその成果を展示する催しであることを謳っていた。それはたんに最初の工業国家として当時世界最先端の産業技術と工業競争力を保持していたイギリスの勢力を誇示しただけでなく，その後ロンドン万博に刺戟をうけて欧米各都市で開催された万国博の基本的性格を長きにわたって規定することになったのである。つまりこの時期には上記の役割のうち，「技術の啓蒙普及の場」「商品の見本市」そ

して「開催国の国威発揚」といった主旨に重きが置かれたといえよう。19世紀後半から20世紀前半にかけて，最初のロンドン博では手薄だった美術品の展示にも力を入れたり，会場での各種アトラクションを充実させるなど，「世界の文化の認識」や「大衆娯楽の提供」といった要素が重視されるようになった。また最も頻繁に万博を開催したパリではとくに，万博は「都市整備の手段」としての役割を果たした。しかし20世紀半ば頃にいたるまで，一貫して産業・科学技術の成果の展示が万博の核となってきたといってよい。

その基調は，第二次世界大戦後変化してゆく。20世紀後半の BIE 公認の一般博ないし登録博のテーマには，「ヒューマニズム」，「人類」，「人間」といった語彙が頻繁に登場するようになる。もちろんこの時期においても最新テクノロジー，とくに宇宙探査やロボット・人間工学系の技術は万博展示の花形であったし，1970年の大阪万国博は，1851年ロンドン万博の理念の延長線上でひとつの頂点を築いた催しであったと見ることもできる。というより，大阪万博は欧米以外で開かれた史上初めての公認博であり，高度成長の結果合衆国に次ぐ経済大国となった日本の立場を色濃く反映したものであった。その後世界経済は石油危機と低成長の時代に入り，一般博は20年以上も開催されていない。ようやく幕を上げた1992年のセビリア万国博は，「発見の時代」という，それまでとは異なるコンセプトを軸にしており（コロンブス大陸到達五百年記念博でもあった），また2000年のハノーヴァー万博は「人類・自然・技術」をテーマに掲げ，しだいに環境保護に軸足を置くようになった[4)]。2005年には日本で二番目の公認博である愛知万博が開かれた。入場者は2200万人ほどで大阪万博の6400万人にははるかに及ばなかったが[5)]，テーマは「自然の叡智」というものであった。すなわち，「地球上のすべての『いのち』の持続可能な共生を，全地球的視野で追求することが，21世紀における地球社会の構成員すべての課題」というメッセージとともに，新しい世紀の万博のひとつの方向性がはっきりと打ち出された[6)]。

3　“Better City, Better Life”

その愛知万博の５年後に開催された上海万国博は，「より良い都市，より良い生活」というテーマを設定している。やや意外なことだが，「都市」というキーワードをテーマとした初めての万博となる。ここで「意外」と表現したのはふたつほどの意味がある。ひとつは，基本的には上海万博も自然環境との共生という新しい潮流に棹さしながらも，ある意味でその理念の延長線上からは微妙に逸れている都市というモティーフを据えてきたこと。開催場所も，名古屋東部の自然環境豊かな丘陵部を切り拓いて（当初「海上（かいしょ）の森」の自然環境への影響が懸念され批判されたことは良く知られている）会場とした愛知博と異なり，上海市の中心部にも近く，住宅地および企業立地として急速に開発が進んでいる黄浦江両岸の浦東・浦西地区が選ばれた（会場自体はもと造船所の跡地を中心とした場所である）。

もうひとつの意味は，そもそも万博自体が都市と密接に関わってきた歴史があるからである。ある歴史家の表現を借りれば，1851年のロンドン万博は最初の工業国家としての威勢を示すものであると同時に，最初の都市型国家（the first urban nation）であることを宣言する催しでもあった[7)]。そして万国博の開催自体が都市の発展と緊密に関わって来たことも明らかである。ロンドン万博の膨大な余剰金は，現在のサウス・ケンジントン一帯の文化・学術エリアの整備にあてられ，会場の「水晶宮」はロンドン郊外に移転されて，長い間市民のレクリエーション施設としての役割を果たした。しかし，都市整備との関わりで言えば，やはりその後の欧米の主要都市で開かれた万博はよりいっそうそういった性格が強かった。とくにパリは20世紀前半にいたるまで頻繁に万博の会場となり，シャイヨー宮，アレキサンドルⅢ世橋，エッフェル塔，グラン・パレ，プチ・パレなどが万博の施設として作られたことは良く知られている[8)]。膨大な数の観客を迎えるために都市インフラが急速に整備されたことも，上海万博にいたるまでの共通の特徴である。さきほど「やや意外なこと」と書いたが，より正確に表現すれば，あえて「都市」をキーワードにすることが同義反復とみなされるほど，万博と都市は緊密で一体化した関係を保って来たのである。

BIE の認定博として初めて日本以外のアジアで開かれた上海万博において，そういった先祖帰りともいえるようなテーマが真正面に据えられたことはじつに興味ふかい。もちろん中国が今後経済成長の中心となるであろう非欧米地域のリーダーとして，急速に進展する都市化に伴う諸問題に真剣に向き合おうという決意を示していることは間違いない。上海万博演出部の季路徳部長は同万博のメインテーマをめぐるインタビューのなかで，テーマ設定にあたっては人の注目を引きつける一方，真新しいアイディアでなければならなかった。この矛盾しそうなふたつの要件を満たすことは容易ではなかったが，結局は中国や世界が直面している都市化問題に焦点を当てることになったと述べている。その場合都市化における最大の問題は人の問題であり，人と人，人と居住空間，人と自然環境の間には軋轢があること，そして自分たちが発信したいのは，人・都市・環境の調和のとれた共生であることを主張している[9)]。もはや都市はエコロジー・サイクルを尊重しそれを基盤とする以外存立しえない現実を踏まえ，上海万博はこれまでの万博に盛り込まれた理念とテーマを高度に融合させようとする内容を打ち出したと言ってよいかも知れない。ではそのような意欲的なテーマは会場でどのように表現・展示されているのか。またテーマの主旨を，押し寄せる観客ひとりひとりに理解させることにどの程度成功しているのか。次節ではそれを見ていきたい。

4　会場内の配置とテーマ館

上海万博の場合にも，基本的にはこれまでの万博で一般的に採用されてきた各種パヴィリオン内での展示という形態は踏襲されている。万博の歴史においてこの展示方式が採用され

たのは1876年のフィラデルフィア万博あたりからとされているが，実際は1867年のパリ万博でもメイン会場建物の周辺にパヴィリオンを併設する試みは始まっていたので，長い伝統を有していると言えよう。良く知られているように，最初のロンドン博ではすべての展示物が「水晶宮」と呼称されている巨大なガラス張りの建物に収納され，それがこの万博の代名詞となった（正確には若干の展示物が屋外展示されていた）。ただし，東西に長い水晶宮の西側にはイギリスからの展示品が収められ，これは展示品の種類による厳密な四部門30クラス分類の原則に従って配置されていたが，外国からの展示品にあてられた東側は原則的に国別の配置がとられていた。当初すべての展示品をクラス別に配置するということが主催者である王立委員会の方針であったが，各国からの展示品についての情報が届くのが遅れたため（場合によっては展示品そのものの到着も遅れた），委員会は外国部門についてはその方針を断念したのである[10]。つまり同じ建物内で並列展示されていたとはいえ，外国部門はすでにパヴィリオン別展示形式の萌芽を示していたと見ることもできよう。会場内での部門別分類配置ということでは，むしろのちのパリ万博のほうがずっと徹底したものであった。

上海万博の会場は，上海市内を蛇行する黄浦江を挟んで浦東地区と浦西地区に位置しており，会場総面積は５百28万平方メートルに及んでいる[11]。これは愛知万博の総面積を倍増した数値を遥かに超えており，「マンモス博」，「巨大すぎて失敗」などと称された1904年の合衆国セントルイス万博（「ルイジアナ購入百周年記念博覧会」）をも凌ぐほどの，万博史上でも巨大な規模である[12]。浦東地区はさらにＡ・Ｂ・Ｃゾーン，浦西地区はＤ・Ｅゾーンに分割され，東西の会場は地下鉄・バス・渡船によって自由に往来可能となっている。この広大な会場に建設されたパヴィリオンは各国家館や国際機関館をはじめ，テーマ館，企業館，イベント・フォーラム館，ベストシティー実践区などに分類される。

結論的に言えば，今回の上海万博の展示のコンセプトや技法，各種パヴィリオンの配置の方法は，「より良い都市，より良い生活」というテーマを観客に効果的に理解・認識させるための工夫がこらされている。以下その工夫についてごく簡略に述べてゆくが，このような「効果」についてはどうしても実証・検証にそぐわない「主観」が入る可能性もあるので，極力事実に基づいて説明していきたい。

まず指摘すべきは，五つのテーマ館の内容がきわめて充実していることである。会場の配置上，浦東地区のＡ・Ｂ・Ｃ各ゾーンは（数の上では最多の）各国家館が集中的に展開し，浦西地区のＤ・Ｅ各ゾーンは企業館が中心である。五つのテーマ館のうち，三つは一般に「テーマ館」と呼称されている建物内に併設されているが，このテーマ館は会場の中央通りにあたる「万博軸」を挟んで中国国家館と対象をなす場所に立てられており，同館とともに全体のかなめの位置を占めている。また敷地面積では今回の万博の最大級となる巨大な建物でもある。この建物に併設されているのは，「都市の生活館」「都市の生命館」「都市の惑星

館」であるが（以下，各館の日本語表記については日本語版の『公式ガイド』による），この三館は都市と人，都市と生活，都市とその機能，そして都市と環境資源などの問題をめぐって，三つの次元から今回の万博のテーマを効果的に理解させようとする意図が盛り込まれている。いずれも近年の万博の一般的傾向である映像展示を中心としながらも，過度にそれに頼らず，具象的展示方法もふんだんに織り込みながら，観客の五感すべてに訴えかける姿勢が顕著である。

「都市と人間館」の基本的題材は，生活環境はもちろんのこと，家族構成や職業・収入，人間関係，そして住む都市の規模が大きく異なる六つの家族の生活であり，六つの大陸から事例が選択されている。ここでは都市と人間の多元的で複雑な関係が中心となる。ただしそのさい，六つの家族の物語を単なるドキュメンタリー風の映像で流すのではなく，「日常生活，仕事，人付き合い，教育，健康の五つのテーマを設定し，六つの家庭と彼らの暮らす都市を各テーマに沿って相互に比較する[13]」という手法がとられている。ここに見られる理念は，地域や国ごとの多様性のもと，人はより良い暮らしを求めて都市に集まり，都市は人のニーズを満たすべき存在であるという当然すぎる事実である。

「都市の生命館」は都市の機能にかかわる展示であるが，ここでは都市機能をひとつの生命体・有機体としてとらえている。五つのテーマ館のなかで唯一中国が独自に企画制作したものであり，総合プランナーを務めた中国美術学院の許江院長はそのコンセプトについて，次のように語っている。「都市におけるヒト，モノ，カネ，情報，交通機関などの動きは人の血液と言え，各種資源の輸送と廃棄物処理のためのライフラインは人の循環系，行政，教育，メディア，通信，医療，地域コミュニティーなどは人の神経系にそれぞれ相当すると言えます。また，世界の各都市にはそれぞれ固有の文化があり，これは人に例えるならば，魂や精神に相当すると言えるでしょう[14]。」なお館内の「都市広場」スペースで上映される立体映像『魂の広場』は，中国美術学院の蘇夏教授が監督した作品であるが，パヴィリオンごとに上映される無数の映像作品のなかでも，今回もっとも見応えのあるもののひとつであった。

「都市の惑星館」は「人間・都市・地球がともに栄える共生関係」を展示テーマとしたもので[15]，テーマ館のなかでも啓発的・教育的効果を強く意識した内容となっている。興味深いのは「迫り来る危機」と名付けられたホールで，中国の五行思想の五つの元素，すなわち木，火，土，金，水のそれぞれの面から，開発による資源枯渇，ますます深刻化する地球環境の危機について展示を行っていたことである。ただし課題や問題の提示は良く工夫されたものである一方，解決の方法の展示については不十分さや物足りなさを感じた。

「都市の足跡館」および「都市の未来館」は浦西地区のＤおよびＥゾーンに位置し，それぞれ旧工場と旧発電所の建物をそのまま利用している。これ以外にも「日本産業館」は旧造船所のドックを，「中国船舶館」は工場を改造したもので，いずれも急ごしらえの一般のパ

ヴィリオンとは違ってゆったりとした観客動線，建物旧来の利用目的と展示内容の有機的つながりをも彷彿とさせる点に大きなメリットがある。「足跡館」は古今東西の都市の歴史を複数の視角を設定して展示したものであるが，映像的手法とともに文化財級の彫像絵画等を実物展示している。「未来館」は今回の万博の究極のテーマである理想の未来都市のさまざまな像を提示するが，特筆すべきは思想家のシャルル・フーリエや建築家のル・コルビュジエらがかつて描いた未来都市像を再現していることである。これにより理想的な都市像そのものの変遷を複次的・立体的に理解することができ，そこからあらためてテーマ館全体のコンセプトを鳥瞰するまなざしを与えられることになろう。

この両館や企業館，ベストシティー実践区などが配置されている浦西地区に対し，浦東地区の三つのゾーンは各国家館パヴィリオンが中心となる。やはり過去の万博と同様に，今回も数の上では各種パヴィリオンのなかでも国家館が圧倒的多数を占め，集客力の点でもとくに開幕後しばらくは，浦東地区に観客が集中し浦西地区の入場者が少ない「東熱西冷」現象がみられたほどである[16]。広大な浦東地区の大部分を占める国家間すべてが，「より良い都市，より良い生活」というテーマをコンセプトの基軸とする展示を行っていることは言うまでもない。ただ，都市化の度合いやそれに伴う諸課題が大きく異なる国々の間でこのテーマを共通して掲げることは容易ではなく，前出の季路徳・演出部長はそのあたりの事情を次のように語っている。

「上海万博では，先進国であろうと発展途上国であろうと関係なく，世界各国，各地域の『より良い都市，より良い生活』に対する自分なりの考え方をそれぞれのパビリオンが示しています。社会発展のレベルが違い，直面する都市問題も多様であるため，各国のこの問題への理解も千差万別であることを強調しておきたいのです[17]。」

じっさいテーマについての各国家館それぞれの捉え方とアプローチの方法は大きな幅があり，来館者は統一の中での多様性をさまざまに感じ取ることになろう。

今回の万博でもうひとつ特徴的な展示は，浦西地区Ｅゾーンの北東部に配置された「ベストシティー実践区」である。これは世界各地の都市で生活の質を向上させるためにおこなわれている革新的実践方法を紹介展示するものであるが，具体的には世界中から申込のあった100余の実践例のなかから，「住みやすい家」，「持続可能な都市化」，「歴史遺産の保護と利用」，そして「既成環境の科学技術革新」という四つの側面で選定している[18]。ここは実物（模型）展示が中心となる。前記の五つの「テーマ館」がまさにテーマの総論的理解を目的としたものとするなら，来訪者はあわせて「実践区」を視察することによってその各論的な理解を深めることができよう。テーマ館のうち「都市の未来館」はこの実践区内に位置しており，来訪者の動線という点でも効果的であった。

会場での展示以外にも，中国国内の各都市で内外の専門家を招いて今回の万博のテーマに

関連した複数のフォーラムが開催される。題目等は以下の通り。

「情報化と都市発展」（寧波市，５月15日～16日）

「都市刷新のなかでの文化伝承」（蘇州市，６月12日～13日）

「科学技術革新と都市の未来」（無錫市，６月20日～21日）

「環境変化と都市の責任」（南京市，７月３日～４日）

「経済転換と都市・農村の相互作用」（紹興市，９月９日～10日）

「調和のとれた都市における心地よい生活」（杭州市，10月６日～７日）

これらは上海万博の複数のサブテーマと対応する内容となっていると考えられるが，いずれも筆者不参加であったので，論評は差し控えたい[19]。そして万博閉会日の10月31日には上海市で内外の要人や専門家が集ってサミットフォーラムが挙行され，その場で『上海宣言』が発表される運びとなっている。

5　むすびにかえて

会場浦東地区のほぼ中央を南北に縦断しているのは万博軸と呼ばれる，地上二階地下二階立ての巨大なプロムナードである。この両側に中国国家間と三つのテーマ館が納まる建物が配置されていることは前述の通りであるが，この万博軸をさらに黄浦江の方向に北上すれば，両側に「万博センター」と「万博文化センター」という，やはり巨大な建物が鎮座している。「万博センター」は上記のサミットフォーラムや各種イベント，プレス発表，接遇などに利用されるもので普段は一般の来訪者には縁のない施設であるが，浦東・浦西地区全体を鳥瞰するとちょうど中心部に位置している（中国語での建物名称は「世博中心」）。そしてほぼ全面ガラス張りのこの建物は見紛うかたなく1851年ロンドン万博の建物の水晶宮をイメージさせる。これはもちろん最初の万博にたいするオマージュの表明であるが，今回の万博自体が一世紀半を超える万博の歴史を足がかりに，それを回顧し総括するという意図を示しているように思われる。そのひとつの証左が，浦西地区の西側に位置している「万博博物館」であり，万博の長い歴史を振り返る展示内容となっている。なかでもヴィクトリア＆アルバート博物館から借用した第一回ロンドン万博でのカウンスル・メダル（最優等賞）の実物とその加工用ダイスが展示されていたのが珍しく，また象徴的でもあった。

前節で論じたように，今回の万博ではとくにテーマ館の充実ぶりが特徴的であった。パヴィリオン方式の展示が久しく主流となり，万博が来訪者にたいして万華鏡的な大衆娯楽の場を提供する側面が強くなるほど，いわば求心的作用を果たすテーマ館の役割は重要になってくるであろう。おそらく19世紀の万博でそのような役割を果たしたのは，産業技術の粋を集めた「機械館」だったのではないか。パヴィリオン方式が本格的に採用された1876年のフィラデルフィア万博では巨大な機械館が建設されているし，1889年のパリ博の機械館は，広さ

が115メートル×420メートルにおよぶ巨大な空間であった。この建物内には二基のトロッコが稼働し，観客はこのトロッコに乗って「空中から」機械館内を鑑賞したという[20]。産業機械とならび農業機械でもいっそう優れた技術を誇ったアメリカでは1893年シカゴ万博の機械館および農業館は大掛かりな建物であったし[21]，1904年の「最後の19世紀的万博」セントルイス万博では会場最大の建物である農業館の内部を見るだけでも14.5キロメートル歩かねばならなかったという[22]。さらに遡って考えれば，じつは1851年のロンドン万博の水晶宮自体が巨大なテーマ館だったと言えるのではないか。

上海万博は都市と都市化をテーマとして，再び本来の万博と都市の結びつきを装いも新たに強調する催しとなった。最初にあげた万国博の七つほどの役割のうち，「商品の見本市」という側面はやや後景に退いているかもしれない。もちろんこれは実物展示よりも映像展示を中心とする近年の万博の全般的傾向を踏襲したことを示している。このような傾向のひとつの頂点となったのが1985年に筑波学園都市で開催された「国際科学技術博覧会」（ただしこれは BIE 認定の一般博ではなかった）で，「科学博」というより「映像博」と言われ，映像の氾濫ぶりにより博覧会の本質さえ問われることとなった[23]。ある時期までの万博はその時代の商品世界を一堂に会した催しであり，来訪者はそこで現在と近未来の夢の消費生活像を思う存分想起し体験する場であった。むしろ昨今の万博は商品実物の具象的展示ではなく，ひとりひとりの生活や生き方をあらためて問い直すような商品開発や商品像の方向性を示唆することにより，いっそう包括的な視野でその役割を果たしていると言うこともできよう。その上で，上海万博は長い歴史と豊富な文化財を有する中国の強みを生かし，たんに近年の万博の延長線上にとどまらないさまざまな要素を取り入れ，万博の新しい方向性を打ち出すことに成功した。万博閉幕日に発表される予定の『上海宣言』の内容が注目されるが，いずれにしても急速な都市化の途上にある中国にとって，膨大な数の観客が来訪してこの万博のテーマを視聴覚で立体的に理解することの意義はきわめて大きなものがある。そして都市化を軸に持続可能な発展を標榜する今回の上海万博は，国際社会に向けた中国の重要な意思表明ともなるはずである。

注

1）2010年 3 月末時点での発表，『上海万博公式ガイド』2-3 頁。
2）愛・地球博公式ウェッブサイト http://www.expo2005.or.jp/jp/
3）『万国博覧会の夢』，18頁。
4）『万国博覧会の夢』，50-51頁。
5）愛・地球博公式ウェッブサイト http://www.expo2005.or.jp/jp/
6）『愛・地球博公式ガイドブック』，2 頁。
7）Daunton (2007), p. 6. この表現はイギリス近代史の性格を考えれば直ちに異論が出されようが，

ここではその問題には立ち入らない。

8）博覧会都市の形成については，吉見（1992），第２章。

9）『週間万博』2010年６月10日号，18-19頁。

10）*Official Descriptive and Illustrated Catalogue of the Great Exhibition 1851,* vol. 1, “introduction”, pp. 25-26.

11）『上海万博公式ガイド』，扉。

12）*Official Guide to the Louisiana Purchase Exposition at the City of St. Louis,* vol. 1, p. 15.

13）『週間万博』2010年６月17日号，18頁。

14）『週間万博』2010年６月17日号，20頁。

15）『上海万博公式ガイド』，19頁。

16）この事態はその後少しずつ改善されつつあるようだ。『週間万博』2010年６月10日号，４頁。

17）『週間万博』2010年６月10日号，19頁。

18）『上海万博公式ガイド』，162頁。

19）『上海万博公式ガイド』，182-185頁。

20）吉田編（1999），123頁。

21）*A History of the World’s Columbian Exposition Held in Chicago in 1893*, vol. I., Map of the Exposition Grounds.

22）『万国博覧会の夢』，45頁。

23）『別冊太陽（日本のこころ123）日本の博覧会』，210頁。

参　考　文　献

《公式ガイドブック等》

Bureau of Shanghai World Expo Coordination (2010), *Expo 2010 Shanghai China Official Album* (China Publishing Group Corporation)

Johnson, R. (ed.) (1897), *A History of the World’s Columbian Exposition Held in Chicago in 1893* (New York: D. Appleton & Co.)

Official Descriptive and Illustrated Catalogue of the Great Exhibition 1851, 4vols.（本の友社，1996）

Official Guide to the Louisiana Purchase Exposition at the City of St. Louis, State of Missouri, April 30th to December 1st, 1904 (Authority of the Louisiana Purchase Exposition, St. Louis: The Official Guide Co., 1904)

愛・地球博公式ガイドブック制作共同事業体（2005）『愛・地球博公式ガイドブック』（2005年日本国際博覧会協会）

上海万博事務局編（2010）『中国2010年上海万博公式ガイド』（東方出版センター）

千葉県立現代産業科学館編（2000）『万国博覧会の夢：万博に見る産業技術と日本』（平成12年度特別展図録，同館発行）

《二次文献》

Daunton, M. (2007), *Wealth and Welfare: An Economic and Social History of Britain, 1851-1951* (Oxford U. P.)

Greenhalgh, P.（1988）, *Ephemeral Vistas: A History of the Expositions Universelles, Great Exhibitions and World's Fairs, 1851-1939*（Manchester U. P.）
伊藤真美子（2008）「博覧会研究の動向について――博覧会研究の現在とその意義――」『史学雑誌』第117編第11号，103-111頁
久島伸昭（2004）『「万博」発明発見50の物語』（講談社）
中国外文出版発行事務局・上海万国博覧会事務協調局共同制作（2010）『週間万博』（中国外文出版発行事業部刊）各号
『別冊太陽（日本のこころ123）日本の博覧会』（平凡社）
見市雅俊（1979）「万国博の経済史」角山栄編『講座西洋経済史』第Ⅱ巻（同文館）
吉田邦光編（1999）『図説万国博覧会史1851-1942』（三版，思文閣出版）
吉見俊哉（1992）『博覧会の政治学：まなざしの近代』（中央公論社）